

永井荷風著「すみだ川」新潮文庫、新潮社 1952年7月15日刊を読む

すみだ川

1. 俳諧師松風庵蘿月は今戸で常磐津の師匠をしてゐる實の妹をば今年は孟蘭盆にもたづねずにしまつたので毎日その事のみ氣にしてゐる。然し日盛りの暑さにはさすがに家を出かねて夕方になるのを待つ。夕方になると竹垣に朝顔のからんだ勝手口で行水をつかつた後其のまゝ眞裸體で晩酌を傾けやつとの事膳を離れと、夏の黄昏も家々で焚く蚊遣の烟と共にいつか夜となり、盆栽を並べた窓の外に往來には簾越しに下駄の音職人の鼻唄人の話聲がにぎやかに聞え出す。蘿月は女房のお瀧に注意されてすぐにも今戸へ行くつもりで格子戸を出るのであるが、其邊涼臺から聲をかけられるがまゝ腰を下すと、一杯機嫌の話好に、毎晩きまつて埒もなく話し込んでしまふのであつた。
2. 朝夕がいくらか涼しく樂になつたかと思ふと共に大變日が短くなつて來た。朝顔の花が日毎に小さくなり、西日が燃える焔のやうに狭い家中へ差込んで來る時分になると鳴きしきる蟬の聲が一際耳立つて急しく聞える。八月もいつか半過ぎてしまつたのである。家の後の玉蜀黍の畝に吹き渡る風の響が夜なぞは折々雨かとたれた。蘿月は若い時分したい放題身を持崩した道樂の名残とて時候の變目といへば今だに骨の節々が痛むので、いつも人より先に秋の立つのを知るのである。秋になつたと思ふと唯わけもなく氣がせはしくなる。
3. 蘿月は俄に狼狽へ出し、八日頃の夕月がまだ眞白く夕焼の空にかゝつてゐる頃から小梅瓦町の住居を後にテクテク今戸をさして歩いて行つた。
4. 堀割つたひに曳舟通から直ぐさま左へまがると、土地のものでなければ行先の分らないほど迂回した小徑が三圍稻荷の横手を巡つて土手へと通じてゐる。小徑に沿うては田圃を埋立てた空地に、新しい貸長屋がまだ空家のまゝに立竝んだ處もある。廣々した構への外には大きな庭石を据並べた植木屋もあれば、いかにも田舎らしい茅葺の人家のまばらに立ちつゞいてゐる處もある。それ等の家の竹垣の間からは夕月に行水をつかつてゐる女の姿の見える事もあつた。蘿月宗匠はいくら年をとつても昔の氣質は變らないので見て見ぬやうに窃と立止るが、大概はぞつとしない女房ばかりなので、落膽したやうに其のまゝ歩調を早める。そして賣地や貸家の札を見て過る度、何ともつかず其の胸算用をしながら自分も懐手で大儲がして見たいと思ふ。然しまた田圃づたひに歩いて行く中水田のところどころに蓮の花の見事に咲き亂れたさまを眺め青々した稲の葉に夕風のそよ響をきけば、さすがは宗匠だけに、錢勘定の事よりも記憶に散在してゐる古人の句をば實に功いものだと思返すのであつた。
5. 土手へ上つた時には葉櫻のかげは早や小暗く水を隔てた人家には灯が見えた。吹きはらふ河風に櫻の病葉がはらはら散る。蘿月は休まず歩きつゞけた暑さにほつと息をつき、ひろげた胸をば扇子であふいたが、まだ店をしまはずにゐる休茶屋を見付けて、慌忙で立寄り、「おかみさん冷で一杯。」と腰を下した。正面の待乳山を見渡す隅田川には夕風を孕んだ帆かけ船が頻りに動いて行く。水の面の黄昏れるにつれて鷗の羽の色が際立つて白く見える。宗匠は此の景色を見ると時候はちがふけれど酒なくて何の己れが櫻かなと急に一杯傾けたくなつたのである。
6. 休茶屋の女房が縁の厚い底の上つたコップについて出す冷酒を、蘿月はぐいと飲干して其のまま竹屋の渡船に乗つた。丁度河の中程へ來た頃から舟のゆるるにつれて冷酒がおひおひにきいて

来る。葉櫻の上に輝きそめた夕月の光がいかにも涼しい。滑なめらかな満潮の水は「お前どこ行く」と流行唄にもあるやうにいかにも投遣つた風に心持よく流れてゐる。宗匠は目をつぶつて獨ひとりで鼻唄をうたつた。

7. 向河岸むかうがしへつくと急に思出して近所の菓子屋を探して土産を買ひ今戸橋を渡つて眞直な道をば自分ばかりは足許のたしかなつもりで、實は大分ふらふらしながら歩いて行つた。

8. そこ此處に二三軒今戸焼を賣る店にわづかな特徴を見るばかり、何處いづこの場末にもよくあるやうな低い人家つゞきの横町である。人家の軒下や路地口には話しながら涼んでゐる人の浴衣ゆかたが薄暗い軒燈の光に際立つて白く見えながら、あたりは一體にひつそりして何處かで犬の吠える聲と赤兒あかごのなく聲が聞える。天の川の澄渡つた空に繁つた木立きだちを聳そびやかしてゐる今戸八幡の前まで來ると、蘿月は間もなく並んだ軒燈の間に常磐津文字とこはづもじとよ豊とよと勘亭流かんでいりうで書いた妹の家の灯を認めた。家の前の往來には人が二三人も立止つて内なる稽古なかにの淨瑠璃けいこを聞いてゐた。

9. 折々恐しい音して風の走る天井からホヤの曇つた六分心のランプがところどころ寶丹ほうたんの廣告や都新聞の新年附録の美人畫あめいろなどで破れ目をかくした襖ふすまを始め、飴色あめいろに古びた筆筒たんす、雨漏あまもりのあとのある古びた壁かべなど、八疊の座敷一體をいかにも薄暗く照してゐる。古ぼけた葺戸ふしどを立てた縁側の外には小庭があるのやら無いのやら分らぬほどな闇の中に軒の風鈴かざりが淋しく鳴り蟲が静に鳴いてゐる。師匠のお豊は縁日ものゝ植木鉢うゑきばちを並べ、不動尊の掛物をかけた床の間を後にしてべつたり坐つた膝ひざの上に三味線をかゝへ、檜かしのの撥はちで時々前髪こなたのあたりをかきながら、掛聲かこゑをかけては弾くと、稽古本を廣げた桐の小机こゝろを中にして此方には三十前後の商人らしい男が中音で、「そりや何を云はしやんす、今さら兄よ妹と云ふに云はれぬ恋中は……。」と、「小稻牛兵衛こいな」の道行みちゆきを語る。

10. 蘿月は稽古のすむまで縁近くに坐つて、扇子をぱちくりさせながら、まだ冷酒のすつかり醒めきらぬ處あきびから、時々是我知らず口の中で稽古の男と一しよに唄つたが、時々は目をつぶつて遠慮なくあきび嘸あきびをした後、身體を軽く左右にゆすりながらお豊の顔をば何の氣もなく眺めた。お豊はもう四十以上であらう。薄暗い釣つるしランプの光が瘦せこけた小作りの身體をば猶更に老けて見せるので、ふいと此れが昔は立派な質屋の可愛らしい箱入娘だつたのかと思ふと、蘿月は悲しいとか淋しいとか然う云ふ現實の感慨こゝろを通過して、唯だ唯だ不思議な氣がしてならない。其の頃は自分も矢張若くて美しく、女にすかれて、道樂して、とうとう實家を七生かんだうまで勘當そらばんされてしまつたが、今になつては其の頃の事はどうしても事實ではなくて夢あねとしか思はれない。算盤のれんで乃公の頭をなぐつた親爺おやぢにしる、泣いて意見をした白鼠しろねの番頭ばんとうにしる、暖簾あたたかを分けて貰つたお豊の亭主ていしゅにしる、さう云ふ人達は怒つたり笑つたり泣いたり喜んだりして、汗をたらして飽きずによく働いてゐたものだが、一人々々皆死んでしまつた今日となつて見れば、あの人達はこの世の中に生れて來ても來なくてもつまる處は同じやうなものだつた。まだしも自分とお豊の生きてゐる間は、あの人達は兩人の記憶の中に残されてゐるものゝ、やがて自分達も死んでしまへばいよいよ何も彼も烟になつて跡方もなく消え失せてしまふのだ……。

[コメント]

永井荷風の名作「すみだ川」の書き出し。よい文章は、読むだけで文章が絵になり、その絵が連続して動き出し、映画のように映像になり心に染み込む。永井荷風の「すみだ川」ほど、東京の下町の風景を見事に書き現した文章はない。名作。残暑の残る今こそ、じっくりと読み込みたい。